松風閣三郎

現代日本のエッセイ

野原をゆく

毎日新聞社

現代日本のエッセイ

野原をゆく

昭和四十七年六月二十日　印刷
昭和四十七年六月三十日　発行

定価　一〇〇〇円

著者　西脇順三郎
編集人　浜田琉司
発行人　朝居正彦
発行所　毎日新聞社

〒一〇〇　東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇　大阪市北区堂島上
〒四五〇　名古屋市中村区堀内町
〒八〇二　北九州市小倉区紺屋町

印刷　図書印刷
製本　佐久間製本
〈検印省略〉

© Junzaburo Nishiwaki　Printed in Japan 1972

0395-561003-7904

野原をゆく　目次

四季の唄

春　一
水鳥の言葉　一四
春すぎて　一六
夏から冬へ　二三
秋の日　二六
タイフーン　二〇
月、なす、すすき　三一
むさし野　三五
美しい季節　三六
年の終り　三九
四十年前の三田の山　四二
自然の憧れ　四四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

自然の哀愁　四七
イタリアの野を行く　五〇
自然の風情　五三
日本の風情　五六
私の植物考
雑草の美学　六一
雑草と記憶　六三
路傍雑考　七〇
街路の雑草　八五
雑草考　八八
心遠　九〇
故園の情　九一
そくず　九五

くこの話　九六
鳳仙花　一〇〇
イバラの幽霊　一〇一
風流人　一〇三
五月の夜　一〇四
詩人の憂鬱
ひとりで歩く猫　一一
土星の苦悩　一一三
角笛を磨く　一三八
MEMORY AND VISION　一四二
テオクリトス　一六八
曖昧な意味　一七九
トランプ　一八〇

山歩き　一八二
人間の話　一八五
漂泊
旅人　一八九
北海道の旅　一九二
私のローマの休日　一九五
新春　一九九
半島の春　二〇四
二つの旅行　二〇九
日本人の旅行感覚　二一六
ゴーガンの村　二二二
永遠への帰郷
永遠への帰郷　二二七

文学青年の世界　二三〇
美について　二四七
茶人礼賛　二四八
われ、素朴を愛す　二五一
矛盾と偶然　二五三
手　紙　二五五
追憶の美　二五九
野原をゆく　二六一
樵夫と近代芸術　二六五
彫　刻　二六七
ピカソと近代芸術　二七〇
日本絵画　二七九

対談　西洋の言葉　東洋の自然　二八一
著者略年譜　三二三

裴　頴　安　彦　勝　博

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

四季の唄

春

また春が来た。私のように齢をとると、その新生の喜びは若いときのようには、感じられなくなった。小石川の台町に住む親戚から「フキノトウ」を貰ったが、なかなか春の香りがたのしめた。

この地球という、恵まれた天体に、生物として生命的存在を営む人間という運命について考える時、いつも生死の神秘が、私の頭のなかでさまよってくる。青年期には、いかにして生きようかとばかり考えて、死の問題などは真剣に考えたことはなかった。中年期は生死の間をごまかして通過してきた。だが、死の神秘へ、いよいよ近づく、人生の第三期にはいると、人間はいかに死ぬべきであるか、とか、また死ということは、どういうことであるか考えたくなる。

人間は生命欲があるから、無意識に、死を排斥しようとするのが、自然の法則である。しかし、人間は死が自然の法則であると考えても、それだけでは死ぬことの運命をあきらめない。

トウエンメイは、宇宙の永遠性に比較して、人間などは百年まで生きるのさえまれであり、人間の死の運命（窮達）などは天命としてあきらめるべきだと教えた。

またギリシア人もそれと同じ考え方をしていた。ギリシア語で、運命という言葉は「神託の命ずるもの」ということである。要するに天命である。このほうは、単に自然の法則として、あきらめることより

も宗教的であって、神秘的である。

また、霊魂不滅を基本とする仏教でも、キリスト教でも、来世を信じる。この考え方は、死をあきらめさせる古代からの信念である。ハムレットは、母親がその夫の死をあきらめないでいるものとして、母親をなぐさめる言葉に、「すべて生あるものは死ななければならない、みな自然を通って永遠へ行くのだ」という名句がある。これは人間の肉体という自然が死んでも、その霊は永遠に生きているという考え方である。それから、やはりハムレットは、他の場面で、未踏の永遠という国へのいかなる旅人ももどって来ないといっているが、それは勿論死んだ肉体としては帰らないという意味である。

いずれにしても、人間は死の現実をあきらめたほうがよい。私自身どうだかというと、あきらめていると思う。けれども私にとって、どういうあきらめ方が、もっともすぐれているかということが問題になる。またどういうあきらめ方がもっとも美しいか、また栄光的であるかということが、問題になる。しかしこんなことは私自身のまったく個人的なことがらにすぎない。　そして私にはいまだにわからない。

だいたい、「あきらめる」という日本語の意味がよくわからなかったので、調べてみると、漢語の「諦」という意味らしい。それは真実を明らかにして、仏教の「さとる」という意味になるらしい。それが国訓として「あきらめる」という言葉になる。

いずれにしても、生命の終りを意味する死という現実について、その真実を究明してその真実をさとることである。近代人の科学的究明の方法によって考えてみると、その真実というのは自然の法則というものである。人間の生命などは、細胞の生命にすぎない。ある一つの種としての細胞が人間という生物に成長するだけである。死は自然の法則にすぎない。しかしそうした自然の法則は何が制定したのか。これは

宇宙の神秘として、永遠的である。その真実は科学的には究明できないが、やはり天命としてあきらめなければならない。この問題は自然の法則の根本問題であって、おそらく人間の頭では究明できないものであろう。それも人間の宿命的な無能性であろう。

この随筆で私がいっていることは、人間の生死の問題についてである。自分のなかにある死という自然の法則に、服従しなければならない人間の宿命について、私は何かいっているつもりであった。

人間の存在について、私が重大だと意識することは、人間は永遠のなかに存在していることである。人間は永遠のなかへ生れ、永遠のなかへ死んで行くのだと思う。しかしこれも生物の宿命であって、どうにもしようがない。生物のどんなに短い生命の時間でも、永遠の時間の一部分であり、またどんなに小さいものでも、永遠の空間の一部分であると思う。ローレンスは「死の舟」という詩を書いて、忘却への国、永遠の国へ船出のことを書いたが、死の船も生の船も初めから永遠のなかに浮かんでいる。

私はあまり死の問題について触れすぎてしまった。少し生の問題に移動したい。

太陽系の天体のなかで地球だけに人間という生物が存在するとすれば、私はたとえ悪質な人間であっても、私の人間的経験は尊いものだと思う。勿論私にとってという意味である。

もうあまり考えることもなくなってしまった。私は春になると、昔の多摩川の春をおもう。川の水もすんでいて、底に見える土が藤色になってみえる。川を渡ってタマの国へはいって行くと、小川がいたるところに光っている。日本の顔料でなければ出せないようなみどり色の麦の畑のなかに、これも日本の紅色でなければ表現できないような桃の畑が入りまじっている。それは私にとってはこの上ない美しい風景だ。桃の花と麦はどういうわけか私の心をよろこばしてくれる。麦畑を好むヒバリがどことなく聞えてく

る。

それから私はいつも村の細い通りにはいって行く。黒と褐色のまじった小さいイヌがこのやせた旅人を淋しそうに見ている。私はそば屋にはいって醤油くさいウドンをたべてから、レンギョウとボケの咲いている砧の村を過ぎ、太子堂の竹藪のなかを通って、三軒茶屋に出て、「リリー」というタバコを買って渋谷に帰った。

こんなつまらないことのほうが、人間という生物の地球上の経験として、私にとっては相当重大な思出となろう。

（昭和四十四年）

水鳥の言葉

三月末のこと一日鴨狩りに招かれてある海岸に近い沼地らしいところに行ってみた。鴨狩りといっても実は鴨のすきやきをごちそうになるだけのことで、実際に鴨を狩るのでなく鴨をどうして網でとるかということを見せてくれる会であった。

そこに集った人達は多く趣味で鳥の研究をする人であったが、その中で偉そうな人達は皆鳥類学者で世界で名をなした学者もあり、また地球からだんだん失われた、また失われつつある鳥の世界的な学者もすがたを現わしていた。鳥といっても特に水鳥の研究者であった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com